
初恋は血の色に染めて。

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋は血の色に染めて。

【Nコード】

N8087M

【作者名】

はなちよこ

【あらすじ】

主人公、草壁誠は合コンに参加したことがキッカケで命を狙われることになる。

「死んでもらうわ」

僕の目の前に立っている女性が不気味な笑顔を浮かべてそう言った。

彼女の両手に握られているのは日本刀。

それが車のヘッドライトの光に照らされてキラリと光った。

僕はゴクリと唾を飲み込んだ。

3時間前

「誠、遅いぞ！」

待ち合わせ場所の居酒屋の前に行くと、僕より先に来ていた鈴木がそう言った。

「まあまあ。誠は俺達に付き合ってくれてるんだから、そう言うなよ」

ゆったりした口調で田辺が言う。

「それもそうだな。悪い」

「いや、いいよ」

「それにしても。合コンに参加するの、彼女がOKしてくれたんだね」

田辺の問いに僕は息を整えながら答える。

「里奈は人数が合わないから仕方なく参加するってのは知ってるから」

「いいな。誠は彼女がいて。しかも、すっげー美人だよな」

「そうかな？」

僕は笑ってごまかした。

「うん。美人だよ！」と言いたい気持ちをぐっと抑える。

そうなのだ。

今日は人数が足りないから、と鈴木と田辺に頼まれて合コンに参加する。

高校時代から付き合いのある友人の頼みなので断れなかった。他の人からの誘いなら本来は断るのだけど。

だって僕には彼女がいるのだ。

優しくて美人で料理とお菓子作りが得意な完璧な彼女が。

「皆さん、おいくつなんですかー？」

女の子も到着して合コンが始まった。

ショートヘアーの女の子の質問に、鈴木が元気よく答えた。

「俺達、みんな25歳！ おじさんでしょ？」

「そんなことないよー。私達だって20歳だもんねえ」

小柄な女の子が微笑みながら言う。

「いやいや。20歳なんてまだまだ若いよー！ ピッチピチ！」

いつもと全然、キャラの違う鈴木から視線をそらして

ウーロン茶に口をつけた。

ふと目の前に視線を向けると。

一人の女の子と目が合った。

「名前はなんていうんですか？」

彼女の言葉に、僕は普段通りの口調で答える。

「僕は草壁誠。君は？」

「私は宮代葵です」

宮代さんはそう言ってニッコリ笑った。

黒く長いストレートヘアーの髪がサラリと揺れる。

僕は一応、愛想笑いをしておいた。

すると。

彼女の頬が一瞬、赤くなった。

もう酔っているのだろうか。

それまで大人しかった宮代さんが突然、元気になり、からあげをお皿に取り分けて僕に渡してくれた。

「あ、レモンいりますよね」

彼女の言葉に僕が「いらない」と言おうした瞬間。

からあげはレモンの汁でべっちょり濡れていた。

それだけなら、別にかまわない。

しかし。

その後、宮代さんは僕のグラスにビールをつごうとして
うっかり手がすべってテーブルをビールまみれにするわ
店員とぶつかって料理を床にぶちまけるわ

電話をかけようと席を立った僕に駆け寄ってきて

「気持ち悪いんですか？」と言って本人の答えも待たずに

トイレに引っ張っていたり。しかも、うっかり女子トイレに入
っちゃうし。

とにかく久々にスゴイ子を見た。

彼女に全く悪気はないらしく。

居酒屋を出る頃には、しゅんとしていたので「女の子はちょっと
ドジなくらいが可愛らしいよ」と慰めた。

宮代さんは僕の言葉で元気を取り戻したようで、元気に皿を割っ
ていた。

これで2枚目だ。

「じゃあ俺達は二次会に行くから」

鈴木言葉に僕は頷いた。

「ちゃんと宮代さんを送って行ってあげてね」

田辺がニツコリ笑ってそう言う。

「じゃあ、葵をお願いします」

ショートヘアの子と小柄の女の子がペコリと僕にお辞儀をした。
そして。

4人は夜の街へと消えていった。

「さて。行きますか」

僕はそう言って歩き出した。

「あ、はい」

宮代さんが言った。

彼女はその後、用事があるとかで。

僕も二次会まで行く気はなかったので駅まで彼女を送って行くことにしたのだ。

宮代さんは大きなバッグを持っていた。

まるでこれから家出でもするようだ。

「持とうか？」

僕がそう言うと、彼女は首を横に振った。

居酒屋で飲んでいた時とは違い、宮代さんは随分と大人しかった。

黙ったまま、ゆっくりと彼女のペースで街を歩いた。

ふと。

人気のない細い路地にさしかかった時。

隣に歩いていたはずの宮代さんがいなくなっていることに気がついた。

振り返ると。

彼女は僕から少し離れたところで立ち止まっていた。

「どうしたの？」

僕が足を止めてそう言っても。

彼女は何も言わない。

辺りは夜の静寂に包まれている。

だから彼女の表情は分からない。

「草壁さん、貴方はとても良い人なんですね」

宮代さんがようやく口を開いた。

「そうかなあ」

「はい。とても私の好みのタイプです」

「え？」

「外見も性格も、とても私の好み」

「……これは告白……だよな。」

でも、僕には彼女の里奈がいる。

「嬉しいけど……最初にも言ったように僕には彼女がいるから」

僕がそう言い終わるより先に宮代さんは持っていたバッグからなにかを取り出した。

細長い棒のような何か……。

それを両手で持ち顔の前でかまえる。

竹刀？

いや。

月の光を浴びて鈍く光るソレは。

日本刀だった。

「あ、あの……それ、もちろんオモチャだよな？」

「いえ。もちろん本物です」

彼女は落ち着いた口調で答える。

「な、な、なんでそんなもの持ち歩いてるの？ 銃刀法違反だよ？！」

「関係ありません。貴方を殺せば、これにはもう用はなくなるのですから」

「はあ?! こ、殺す?!」

「悪いけど……」

彼女は刀を持つ手にぐつと力をこめて続けた。

「死んでもらうわ」

宮代さんは不気味な笑顔を浮かべてそう言った。

僕は後ずさりをした。

額から嫌な汗が流れる。

ドッキリだと言ってくれ!

今なら「ちょっとしたイタズラでした。テヘ」とか言われても広

い心で許すから！

刀が振り下ろされた。

ひゅ、と風を切る音がした。

瞬間。

バキッ。

僕のすぐ横にあつた木の枝が地面に落ちた。

「んー。腕が鈍ってるみたいね」

宮代さんは自分が切り落とした枝を見て言った。

今だ！

僕は一目散にその場から逃げ出した。

全身全霊を足にこめて。

宮代さん……いや犯罪者から逃げることにだけに集中して。

ただひたすら走った。

僕は夜の風となった。

命からがら自分のアパートまで逃げてくると。

部屋のドアを開けようとした。

瞬間。

ガチャ。

先にドアが開いた。

「うわあ！！」

僕は驚いて地面に尻もちをついた。

部屋から姿を現したのは。

「どうしたの？ 誠君」

エプロン姿の里奈だった。

愛する恋人の顔を見た瞬間。

僕は涙が出そうになった。

「顔が真っ青だよ？ 大丈夫？」

心配そうに僕の顔を覗き込む里奈。

「うん。ちよっとね……」

そう答えると辺りをキョロキョロと見回して

あの犯罪者がいないことを確認した。

そして部屋の中に入った。

「里奈こそどうしたんだよ。今日は友達と予定があるって言ったのに」

「何だか無性に誠君に会いたくなつて友達と遊ぶ時間も早めに切り上げて、ここに来ちゃったんだー」

里奈はそう言つてニツコリ笑う。

ああ……女神は本当にいるんですね……。

女神様は台所に戻ると、ネギを洗いながら言った。

「買い物してないから大したもの作れないけどラーメンなら作れるよ」

細い手に包丁が握られた。

灯りに照らされてギリリと嫌な光を放っている。

僕はついさっきの出来事を思い出した。

「あ……いや……食欲ないんだ」

「そうなの？」

「うん。ごめんね」

「いいの。謝らないで」

里奈はそう言つてエプロンを取った。

「じゃあ……私なら、いいかな？」

頬を赤く染めながら彼女はカーディガンを脱いだ。

僕は思わず女神様に抱きついた。

鼻歌混じりに街を歩く。

足取りは軽い。

隣に里奈がいないのは寂しいが、仕事じゃあ仕方がない。

それに数日後には会えるのだし。

店のドアを開けるとカランコロンと可愛い音が響いた。

「いらっしゃいませー」

マスターの明るい声が耳に心地良い。
窓際のいつものテーブルに座ると。

「草壁君は今日もブレンドコーヒーだね」
マスターの言葉に僕は頷いた。

ガタイの良い彼はニツコリ笑ってカウンターの向こうに消えた。

行きつけの喫茶店。

日曜日でも午後3時以降はそれほど混雑していない。
店内はコーヒーの臭いが漂っている。

幸せだな。

仕事も休みで行きつけの喫茶店のコーヒーは美味いし
美人で性格が良くて料理上手で床上手な彼女までいて……………

でも、付き合い始めの頃はそれほど上手いってわけでもなかった
な。

僕のおかげか？

いやいや。それはないか。

それにしても。

昔の不幸を今、全部取り返しているかのように今は幸せだなあ。

「昨日は変なことがあったけど」

僕はそう呟くと水の入ったグラスに口をつけた。

「お待たせしました」

ブレンドコーヒーがテーブルに置かれた。

ん？

女の子の声？

この店では聞きなれない声に顔を上げると。
思わず口にふくんだ水を噴き出した。

コーヒーを運んできたウェイトレスの顔に水がかかった。

「お……………お前……………」

僕は震える声でそう言った。

足がガクガクと震えた。

「昨日は合コンで会いましたね」

そいつはそう言っただけでニッコリ笑った。

「合コンのことじゃない！ 命狙ってきただろ！」

「さあ？ なんのことですか？」

「とぼけるな！ 日本刀で僕を殺そうとしたじゃないか！」

僕はそう言っただけでテーブルをバン！と叩いた。

瞬間。

目の前の女の体がぐらりと揺れた。

そして彼女は床に倒れた。

「・・・・・・・・ちよっ！」

僕は驚いてそいつを見た。

マスターが駆け寄ってきて女を起こす。

すると。

ぐーぎゅるぎゅるぎゅる。

倒れた女の腹から大きな音。

「宮代さん、もしかしてお昼食べてないのか？」

マスターの言葉に彼女は頷いた。

「初めてのバイトで緊張してしまっただけに喉に通らなくて・・・・・・・・」

「でも、さすがに空腹のままで働けないだろう」

マスターはそう言っただけで笑った。

目の前でサンドイッチを頬張るウェイトレス。

そう。

彼女は昨日、僕を殺そうとした女。

犯罪者なのだ。

でも。

そんな犯罪者は僕の向かい側に座って

美味しそうにサンドイッチを食べている。

「なんで僕が・・・・・・・・」

「安心して。バイト中は襲わないから」

「安心して、じゃねーよ！　そもそも襲うな！」

こんな時に限ってマスターは呑気に買い出しに行ってしまった。
この時間は客が来ないだろう、と言っ

さつきまで店内にいた客もとくに帰ってしまった。

よって、僕は現在、この犯罪者と2人きりなのだ。

警察に電話しようかな……

そう思った、ポケットを探ってみたが携帯がない。

どうやら家に置いてきたようだ。

……ダメだ。どこにも助けを求めることができない。

「仕方ないじゃない」

犯罪者がそう言った。

「なにが仕方ないんだよ」

僕の問いに辺りをキョロキョロ見回してから答える。

「貴方を殺さなきゃいけないんだから」

「……なんでだよ！　なんか理由があるのかよ！」
すると。

彼女は突然、下を向いた。

拳をギュツと握ってスカートをつかむ。

そしてポツリと言った。

「私が初めて恋をした人の心臓が必要なんだもん」

「は？！　初めて恋した人って……」

犯罪者は黙ったまま。

「もしかして俺のこと？！」

彼女はこくりと頷いた。

「初めて？！　だってお前、20歳だろ？！」
いや。

突っ込むところはそこじゃないだろ、と口に出した後で思った。

「魔女の修行で恋なんてする暇なんてなかったのよ！」

「はあ？！　魔女ってなんだよ」

「魔女を知らないの？」

「魔女は知ってるよ！ でも魔女なんて実在しな」

僕の言葉に魔女と名乗った犯罪者は扇子を取り出してそれを小さく円を描くように動かした。

ポン。

どこからか鼓のような音が聞こえた。
すると。

コーヒークップからブレンドコーヒーが見る見る内に消えていき、
コーヒーに代わってカエルが中から飛び出した。

僕は驚きで言葉が出なかった。

目の前の魔女は得意気に笑った。

「どう？ 信じた？」

「ああ……お前が普通じゃないことは分かった」

僕の言葉に彼女は不満そうな顔になり、再び扇子を回した。
ポン。

鼓の音とともに皿のサンドイッチが増えた。

扇子回す。

ポン。

もう1セットコーヒークップが現れ
ポン。

どこからか温かいコーヒーが注がれた。

「わ、分かった。魔女だってことは分かった！」

「……そう。それならいいわ」

魔女は肩で息をしながら力なく笑った。

「……どうかしたか？」

「魔法って使くと疲れるのよ」

「そうなのか……」

「……体力を使うほうがよっぽどマシ……」

ぐったりとしながら魔女が言う。

「でも、魔女って、こう……杖を持ってるイメージがある

けどな」

「私のおばあちゃんが日本が大好きでね。それで魔女なのにやけに日本風なのよ」

「へえ。なんだ。お前、クォーターなのか」

「まあね」

そう答えた彼女の顔がどこか寂しそうだった。

カランコロン。

鈴の音と共に店のドアが開いた。

「おお。仲良くやつてるみたいだな」

マスターが買い物袋を抱えて帰ってくるなり僕達を見てそう言った。

「はい」

魔女が笑顔で答える。

僕はハツとした。

こいつは犯罪者だぞ！

仲良くなってる場合じゃない！

早くここから立ち去ろう。

僕は立ち上がって会計を済ませて慌てて店を出た。

追いかけてくる様子はない。

早足でアパートへ向かった。

近所の公園の前を通りかかった時。

ガシツと肩を掴まれた。

心臓が飛び上がった。

恐る恐る振り返ると。

後ろにいたのは魔女だった。

しかし。

昨日の勢いはどこへやら。

僕が立ち止まるとその場にしゃがみこんだ。

「……………大丈夫かよ」

「貴方・・・自分の・・・心配・・・」

「いや。お前は自分の心配をしろ」

魔女は息を整えてから言った。

「お皿を割っちゃってこつそり元に戻してきたのよ・・・魔
力を使いすぎたわ」

「・・・何枚割ったんだよ」

「それより」

魔女がそう言って立ち上がった。

長い黒髪が揺れる。

僕は後ずさりをした。

「あ」

彼女はマヌケな声を出した。

「あ？」

「大事な刀・・・喫茶店に置いてきちゃった・・・」

魔女はそう言うとかクツと肩を落とした。

「お前、バカだろ」

「うるさいわね！」

彼女は大声で言うとかポケットに手を入れた。

「あれ？」

再びマヌケな声を出した。

「今度はなんだ・・・」

「・・・うん。なんでもない・・・今日は見逃して
あげるから・・・」

今にも泣きそうな顔で魔女がそう言った。

「もしかして扇子も忘れたか。あれがないと魔法が使えないんだろ」
彼女は俯いて黙ったままだ。

「んじゃ。今日は襲われずにすむな」

僕はそう言うと、くるりと向きを変えて魔女に背を向けた。

ふと、歩き出そうとした足を止めて、真っ直ぐ前を見たまま言っ
た。

「なんで初恋の相手を殺さなきゃいけないんだ？」

「おばあちゃんが……病気なのよ……」

「病院行けばいいだろ」

「魔女特有の病気なのよ。人間が治せるものじゃない」

「だから僕を殺すのか？」

「その病気を治す薬の材料の中に『初恋の相手の心臓』があるの」

「おっかねえなあ。それは俺じゃないとダメなのか」

「薬を作る人間の初恋の相手、つまり貴方のことよ」

「でも、お前は本当に僕が好きなのか？ 普通は初恋の相手を殺そうと思わないよ」

「殺したいほど好きっていう気持ちもあるわ」

「……ねえよ」

僕は呆れて溜息をついた。

「大丈夫よ。殺すのは一度だけ。後で蘇生の魔法をかけるから」

「心臓がなくてもそれで生き返るのかよ……」

僕の言葉に魔女は驚いた顔をした。

「バカが」

「薬で心臓を作ることできるわ。でも私はまだやったことないから……もしかして、おばあちゃんが作れるかも……」

魔女がブツブツ独り言を言い出したので。

僕は「もういい」と言って歩き出した。

その時だった。

一台の車が僕の横をすごいスピードで通っていった。

「……里奈？」

僕はポツリと呟いた。

一瞬だけ見えた。

助手席に乗っていた女性。

里奈の横顔だった。

「まさか、な」

今日、里奈は仕事だ。

彼女の職場はここから車で1時間以上、離れた所にある。
仕事中なら、こんな場所にいるはずがない。
いや。

見間違いだ。

この世に似た人間は3人はいるっていうしね。

「貴方、そういえば彼女いるんだっけ」

魔女が思い出したように言った。

「ああ」

「さっきの人がそうなの？」

「……こいつ……ドジのくせに勘は鋭いな。」

「だからなんだよ」

「浮気してる」

「え？」

「さっきの女の人は浮気してる」

彼女は真面目な顔でそう言った。

「なんでそんなことが言えるんだよ」

「魔女の勘よ」

「そんなものは当てにならねーよ」

「でも……」

「うるさい！ お前は僕のことを殺そうとした犯罪者なんだ。そんな奴に何が分かるんだよ！」

僕はそう言つと走り出した。

魔女は追いかけてこなかった。

「お父さん！」

僕は大きな背中に向かってそう叫んだ。

でも父は振り向かない。

どんどん小さくなる父の背中。

「誠。仕方がないのよ……」

そう言って母がポン、と肩を叩いた。

ジリリリリリリ。

アナログな目覚ましの音が鳴り響いていた。

「……………嫌な夢、見たな」

よろよると布団から起き上がり、台所へ行く。

冷蔵庫を開けて牛乳パックを取り出した。

直接、口をつけて牛乳を喉に流し込んだ。

「誠。仕方がないのよ……………」

夢の中でそう言った母の顔が浮かんだ。

「裏切り者」

僕はそう呟いて口についた牛乳を手で拭った。

居間に移動してテーブルの上の携帯に目をやる。

布団の横に転がった時計に視線を移した。

少し考えてから、携帯で電話をかけた。

仕事を休んだ。

今日は会社に行っても何も手につかないだろう。

昨日、あの魔女が変なこと言ったから。

不安で仕方がない

男らしくないのは分かってる。

分かっているけど僕にはもう里奈しかいないんだ……………。

僕はいつのまにか里奈のアパートに向かって歩いていた。

「連絡しておうこう」

そう呟いてポケットに手をやった。

「……………携帯、家に置いたままだ」

戻るのも面倒なので、そのまま彼女の家へ行くことにした。

合鍵は持つてるから大丈夫だ。

里奈のアパートに着くと。

目を疑った。

アパートの駐車場にスポーツカーがあったのだ。昨日、里奈に似た人が助手席に乗っていた車。なんで彼女のアパートに……………。

「偶然だよな」

そう自分に言い聞かせて里奈の部屋の前に立つ。

インターホンを押す。

応答がない。

もう一度押してみる。

やっぱり応答がない。

僕は少し迷ったが合鍵を使って部屋に入ることにした。

ガチャ。

ドアを開けて中に入る。

「里奈」

人の気配がない。

誰もいないのか？

靴を脱いだ時に気づいた。

里奈の靴と。

それから。

男物の革靴が一足。

「……………友達が……………きてるのかな……………」

僕はそう言いながら台所を通り過ぎ、居間に入った。

誰もいない。

そうか！

里奈のお父さんが急に来て。

この近所を案内してるんだ。

靴は履き替えたんだ。

すると。

「アハハ。やだあ」

里奈の声が聞こえた。

風呂場の方からだ。

そうか。

お父さんの背中を流してあげてるのか！
なんて優しいんだ……………。

僕は風呂場の近くに立った。

今度は男の声が聞こえた。

「なあ。さっきインターホンの音、聞こえなかった？」

「ああ。聞こえたかも。いいのよ。居留守つかえば」

「彼氏だったらマズくない？」

「誠？ 平気よ。今日は仕事だもん」

「ああ。そういえば今日は月曜か」

「それに……………誠よりも私は強のこと愛してるもん」

僕は風呂場のドアを開けた。

2人は驚いてこちらを見た。

浴槽に2人で仲良く入っている。

「あ、誠君！ 違うの！ これはね……………」

里奈がタオルで胸を隠しながら言った。

「いいよ。この状況でどうやって言い訳するんだよ」

彼女は黙りこんだ。

「里奈も父さんや母さんと一緒だ。裏切り者だ」

僕はそう言っていると部屋を飛び出した。

「こんなところで何してるのよ」

屋上の重い扉が開いた音がしたかと思ったら

そんな声が聞こえてきた。

振り向くと魔女が立っていた。

僕は視線を戻した。

フェンスの向こうの街並みを眺めながら言った。

「お前も昼間から僕をストーカーしてきたのかよ」

「別にそういうわけじゃ……………」

「尾行、バレバレだった」

「え？」

下に見える建物の車も人も、まるで模型みたいだ。

「9階か……………。ここから飛び降りれば死ねるな」

ポツリと僕がそう言つと、慌てた様子で魔女が近づいてきた。

「何言つてるのよ！」

「お前こそ何言つてるんだよ。僕を殺したいんじゃないのか？」

「心配だったから尾行したのよ！」

「心配？　なんで？」

「だって……………」

それだけ言つと彼女は黙りこんだ。

「そうか。ここから飛び降りるよりはお前に殺されて、お前の赤ちゃんの病気を治す薬になつたほうがいいか」

「それが……………」

「じゃあ、なんで今日は日本刀、持つてるんだよ」

僕は彼女が右手に持っている大きなバッグを見た。

合コンの時も同じバッグ持ってたな。

「田舎に帰ろうと思つて……………」

「その前に僕を殺して心臓でも何でも取つていけよ」

「どうしてそんなこと言うのよ」

「だって俺にはもう守る人はいないから」

「え？」

「天涯孤独つてやつだ。父親は僕が5歳の頃に家を出てつて母親は小3の頃に男を作つて出ていった。まあ、捨てられたつてわけだな」

「それからずっと1人なの？」

「いや。ばーちゃんが面倒見てくれた」

僕は空を見ながら答えた。

「おばあちゃんは今どこに住んでるの？」

魔女の言葉に僕は空を指差した。

「・・・・・・・・そっか」

彼女はそう言うのと黙りこんでしまった。

「だから、お前のばーちゃんが病気だつて聞いた時、ちよつと協力してやるうかなって思った」

「でも・・・・・・・・」

「いいよ。心臓持つてけ。あ、即死にしてくれよ。痛いのは勘弁な」

僕はそう言うのと魔女の方を向いて両手を広げた。

「だから・・・・・・・・その・・・・・・・・」

「なんだよ。ばーちゃんの病気、治ったのか？」

彼女は首をブンブンと横に振った。

「じゃあ、やっぱり心臓が必要だろ。遠慮するな」

僕の言葉に魔女はじつとこちらを見つめた。

そして。

「じゃあ目を閉じて」

魔女の言葉に僕は素直に従った。

「痛くないからね」

彼女はそう言うのとカバンから何かを取り出した。

とうとう。

僕は死ぬのか・・・・・・・・。

でも誰かの役に立って死ねるんなら、まあ、いいか。

すると。

ポン。

鼓の音が聞こえた。

「ちよっ・・・・・・・・お前、それ」

僕がそう言った瞬間。

スパーン！

ものすごく良い音が屋上に響いた。

それと同時に。

頭にもものすごい衝撃と微妙な痛み。

目を開けると。

ハリセンを持った魔女が立っていた。

「イイ音がしたわ」

彼女は満足そうにそう言った。

「そんなことしてる場合じゃないだろ。僕の心臓は……」

「そんなもの必要ないわ」

「え？」

「薬の本、1ページ間違っただけで読んだみたい。おばあちゃんの病気を治す薬に初恋の相手の心臓は必要なかった」

僕は開いた口が塞がらなかった。

そして。

魔女の方に右手を差し出して言った。

「貸せ」

「え？」

「ハリセンだよ。お前を叩いてやらないと気が済まない」

僕の言葉に魔女は素直にハリセンを渡した。

瞬間。

ポン。

鼓の音と共にハリセンが一輪の花に代わった。

僕は黙って花を見つめた。

「私が初めて好きになった人が、死にたい、なんて弱音吐く人なんてガッカリ」

「そうだな……」

僕はそう言うときだけ笑った。

「貴方が死んだら、私が悲しいじゃない!!」

魔女はそう言うとき扇子を回した。

鼓の音と共に花が蛇に変わった。

蛇はグネグネと動き、口を大きく開けて威嚇してきた。

「ちょ、お前、何してくれるんだ!」

僕が蛇を放り投げて前を見ると。

魔女は既にドアの前にいた。
そして。

くるりとこちらを振り向いて言った。

「おばあちゃんも貴方に会ったら、きっと気に入ってただろうな」
そう言つて魔女は優しく微笑んだ。

結局。

あれ以来、魔女・・・・いや宮代さんは僕の前に姿を現すことはなかった。

田舎に帰ると言っていたけど、どこにあるのかも知らないし連絡先だつて知らない。

だから。

もう会うことはないだろう。

「お疲れ様です」

僕はそう言つて会社を出た。

辺りはすっかり夜の闇に包まれていた。

里奈の浮気現場を見てから3ヶ月が経った。

あの次の日、僕は彼女と別れた。

最初は随分と落ち込んだが、鈴木や田辺が励ましてくれたり

喫茶店に行つてオーナーに愚痴を聞いてもらつ内にスツカリ元気になった。

でも。

まだ彼女を作ろう、という気にはならない。

細い路地を歩いていた時だった。

ざっ。

突然、脇道から人が現れた。

暗くて顔がよく見えない。

ただ相手が女性だということは分かる。

女性はどこからか日本刀を取り出して両手に持ち、かまえた。
月の光に照らされた刀が不気味な光りを放つ。

「…………お前、趣味悪いな」

僕の言葉に目の前の女性が笑い出した。

「死ぬほど驚かせるのは魔女の愛情表現の一つよ」

魔女である宮代がそう言って刀をカバンにしまった。

「そっいえば、ばーちゃんはよくなった？」

「うん。すっかり元気よ」

そう言った宮代の声が弾んでいた。

僕は頭をポリポリ掻きながら言った。

「会ってみたいな」

「うん。きつと喜ぶよ」

月の光に照らされた魔女の笑顔は何だか眩しかった。

<おわり>

（後書き）

ここまで読んでくれた方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8087m/>

初恋は血の色に染めて。

2010年10月8日13時58分発行